

2006年3月31日

文化学院
理事長 松崎 淳嗣 殿

社団法人 日本建築学会関東支部
支部長 坂本 功

文化学院本館の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のことと存じ上げます。

日頃より、本会の活動につきましては、多大なご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて貴校におかれましては、現在、文化学院お茶の水校舎の建て替え計画を進めておられ、本館も含め、4月以後に校舎の取り壊しが予定されている由、聞き及んでおります。

文化学院本館は、講堂とともにアトリエ、版画室、ギャラリー、事務室などを含む複合施設で、ご承知のように、国会議事堂、帝室博物館などと同時代の昭和12年に建てられた作品です。昭和初期頃の雰囲気をよく伝えるとともに、キリスト教徒であり「自由思想家」であった、西村伊作の独特の作風を反映しております。

この作品は敷地巾一杯にファサードを見せ、マロニエ通りの景観形成にとって、長い間重要な役割を担ってきました。最近では、変わりつつある景観にとって、従来以上に大きな価値を持ちつつあります。

また、文化学院の創設者である西村伊作の建築活動は、住宅を中心に進められたため、本館は、彼の作品の中でも特別な存在であり、代表作の一つといってよい作品です。したがって景観保存の視点からみても、建造物としての本館の価値からみても、文化的な価値は高く、きわめて貴重な作品と評価されます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

敬具

2006年 3月31日

文化学院本館についての見解

社団法人 日本建築学関東支部
歴史意匠専門研究委員会
主査 大野 敏

文化学院本館は、東京都千代田区神田駿河台2丁目5番地に位置する。この地は文化学院が大正10年(1921)に開設されて以来、同校の敷地として現在も使われている。

文化学院は、西村伊作によって創設された学校で、戦前は「子女教育」を目的としていた。大正14年(1925)に開設された大学部は、婦人参政権運動にも関わっていた与謝野晶子、鉄幹夫妻による文学部、石井柏亭(二科会創設者、洋画家)による美術部を擁していた。

創設者の西村伊作はクリスチャンであるとともに社会主義的思想を持ち、「自由思想家」と称していた通り、中学校令、高等女学校令から離れて、各種学校として学校を開設し、戦前、戦中を通じて自由教育を標榜した。このため昭和18年(1943)に不敬罪で投獄され、学校も閉鎖されることになった。学校は昭和21年(1946)4月に再開され、伊作の没後(昭和38年1963)、主に伊作の子供たちによって運営を続け、文学科、美術科は名称を変えながら現在に至っている。文化学院建築科は、昭和42年(1967)長男久二氏によって開設された。伊藤鄭爾氏が科長を勤めた時期を最後に、5年前に廃科となった。

1・当該建物の概要

大正10年に開設された当初の文化学院校舎は、2年後の関東大震災で焼失し、その後に建てられた校舎群は昭和に入って整備された。当該建物の本館は、昭和12年に竣工した建築で、校舎として第3期の建物である。南側のマロニエ通りに面した幅35m程の敷地に、通りに接して敷地幅一杯に設けられた奥行9m程の矩形平面を持ち、地上4階の鉄筋コンクリート造に木造小屋組を掛け、瓦を葺いた切妻屋根を載せる。1階東端に中庭へ通ずる半円ヴォールトの入口(間口の異なる2つのヴォールトを接合)を構えアプローチとする。1階は事務室、絵画、彫刻用のアトリエ(2室)、ギャラリー等を持ち、2階に教室(3室)と美術科教員室、3階と4階に講堂を施設し、西側を一部5階として多目的室を備えている。戦後、1階の事務室を、アトリエ1室を合体させて拡大した他は、とくに大きな改修はなされてない。外装はモルタル仕上、内装はペイント仕上、内部各所は木造と板ガラスによるパーティションを設けている。これらについては数次の補修が行なわれたであろうが、ほぼ竣工当時の様相を保っている。

設計は西村伊作本人によって行なわれたが、施工の担当業者は不詳である。また建坪、延床面積など詳細な資料は、いずれも私的な非公開資料のため、現時点で詳細を確認することが困難である。

2・西村伊作の思想と建築観

西村伊作は明治17年(1884)、和歌山の富豪の家に生まれ、明治24年(1891)に両親を失った。旧制中学を卒業した後は、洋書等を取り寄せ、一貫して独学を続ける。油絵、彫刻、陶器などの作品を残す美術愛好家で、建築についても独学で学んでいる。大正10年、文化学院開設と同時に

に建築事務所を設け、住宅を中心に作品を残した。出身地である和歌山に佐藤春夫邸、自邸等が残るが、大きな作品は、当該建物を除いて倉敷のキリスト教礼拝堂（日本基督教団倉敷教会）などがある。

両親の影響をうけて幼少からクリスチャンであるとともに、青年期に社会主義運動の影響を受け、生活改善の思想家、実践家、教育家であった西村伊作の位置づけは、建築家、芸術家である以前に、第一に実践的思想家と捉えるべきであり、生活、教育、芸術等への関心は、自由主義的な独特の思想、価値観、芸術を中心に据えた生活改善運動という姿を採った、一貫した活動の中に位置づけられる。

3・当該建築の建築史的価値について

昭和12年前後に建立された都内の建築は、周知のように宮内庁庁舎（昭和10年1935）、国会議事堂（昭和11年1936）、山の上ホテル本館（昭和11年1936）、東京国立博物館本館（昭和12年1937・重文）、慶応大学信濃町メディアセンター（昭和12年1937）、財務省々舎（昭和14年1939）などが残っている。これらの建築と比較すると、当該建物は細部装飾をほとんど持たない。この私的で簡素な雰囲気、さりげない佇まいを持つ点が当該建物の特徴である。

すなわち、外観、各居室の内観、開口部、細部等に現れた各部のプロポーションは、様式建築とも思える相貌とともに、明瞭ではないが大正期以後の新しい意匠の雰囲気も窺え、局部的に昭和初期ごろの住宅風でもある。しかしこれら異質ともみえる特徴は破綻することなく、まとまりを持っている。当時の先鋭的な雰囲気を伝えるものではないが、戦前の建築の特徴を、おだやかに、よく現わした建築である。

また、様式建築の気配を持ちながら、装飾を持たない独特の雰囲気は、様式的特徴の明確な建築が残されてきた中で、かえって好対照の価値を見せている。この作品の背景には、目立たずさりげない美しさに、大きな価値を見出した西村伊作の思想、芸術観が横たわっていると考えられる。したがって、当該建物は、戦前の建築に共通する特徴とともに、得難い独特の雰囲気を合わせもつ作品と評価することができる。

さらに、敷地幅一杯に建ち、トチノキの街路樹が並ぶ「マロニエ通り」に面したファサードは、景観にとっても大きな存在であり続けたと思われる。もと住宅街であったこの通りは、60年代末頃から徐々に再開発が始まり、80年代、90年代の変化を経た最近になって、さらに大きな変化がみられるようになった。この過程で、当該建物は、通りの景観に強い影響と一定の方向性を与え続けてきたと思われる。このファサードは、最近の変貌しつつある「マロニエ通り」の景観にとって、きわめて重要な要素であり、保存がかなうならば、その価値はますます大きくなるであろう。

文化学院は戦前、伊作、与謝野夫妻、石井柏亭などを中心とした先進的文化人グループの思想的、文化的拠点であった。当該建物は、20年学監を勤めた与謝野晶子（昭和17年1942没）が学院を離れて数年後に竣工した建物だが、上記の建築史的価値に加えて近代史の文化的側面から見ても象徴的な価値を持つ建築と判断される。